

Ethologie の諸問題

前 川 純 孝*

Some Problems of the Studies on Ethology

Sumitaka MAEKAWA*

目 次

- I 序
- II Ethologie の起源
- III 比較行動学の立場
- IV 比較行動学と行動主義
- V 比較行動学と精神分析学
- VI 比較行動学の課題

I 序

生活体の行動は、衝動にもとづく内的緊張の解放過程であって、しかもそれは外的環境との関連においてつねによりよい安定性を指向している。動物の内的安定確保にもとづくこれらの行動はそれぞれの種に固有な様式でなされ、多くの場合、本能的保証を有している。従来の行動研究では、刺激-反応の図式に重点がおかれ、生活体の能動的自発性についてはほとんど顧みられることがなかった。生活体は生命過程の秩序を外的要因だけに求めているのではない。生活体の行動を外的刺激条件との関連で一義的にとらえようとする機械論的行動主義の立場は、

* 社会系一心理学 (Department of Liberal Arts and Sciences—Psychology)

多くの人びとによって批判され、他方では、行動の発現にかかわる生活体自身の果たす役割の重要性が指摘されるにつれて、本能行動の研究を中心とした Ethologie の成果がしだいに注目されてきた。

本稿では、Ethologie の構想を概観し、合わせて若干の問題点を考察してみよう。

II Ethologie の起源

今日、Ethologie という語に対しては「比較行動学」⁽⁶⁾、「行動学」^(2, 11)、「習性学」⁽⁹⁾、「動物行動学」⁽³⁾など、実にさまざまな訳語が用いられている。

前田は1954年に、日本の心理学者としてははじめて、Max Planck 比較行動生理学研究所に K. Lorenz を訪ね、Ethologie に「比較行動学」という訳語を当てて、かれらの研究成果をわが国にいち早く紹介した⁽⁶⁾。それ以来、心理学の分野では、Ethologie を「比較行動学」と訳出してきたのに対し、生物学や生理学等の分野では、「比較行動学」のほかに「習性学」や「動物行動学」等の訳語をしばしば用いてきた。

比較行動学という訳語は、Lorenz 一派が自分たちの研究を Vergleichende Verhaltensforschung として位置づけ、研究誌 “Zeitschrift für Tierpsychologie” の副題としたことに由来

している。当初, Lorenz は Ethologie という語を用いることには反対であった。なぜならば, Ethologie という語は哲学の分野と密接に関わっており, したがって Ethologie という語で自分たちの研究領域を厳密に規定するのは困難であると考えたのであろう。かくして Lorenz は, 初期の頃この学問を “comparative behaviorology” と称したが, Ethologie がしだいに知れ渡るようになり, 就中アメリカに浸潤しはじめるにつれて, “Ethologie” という語を使用するようになる。彼はのちになって「Ethologieという用語の方が短くて, やはり一番よい」と述懐しているほどである¹³⁾。

ところで, 動物行動の研究に Ethologie という用語をはじめて取り入れたのは O. Heinroth であるといわれる。彼はガチョウとアヒルについての行動研究のなかで, 動物の「習性」に Ethologie という概念を当てた¹³⁾。しかし, この Ethologie という語は以前から心理学をはじめその他の関連領域でしばしば用いられてきたし, Heinroth 以後にもいろいろな人によって使用されている¹³⁾。たとえば, J. S. Mill は19世紀の後半に人間性についての厳密な科学を樹立しようとして, 性格の科学を “ethology” と名づけた^{12, 13)}。また, C. Kluckhohn は今世紀の半ばに文化の説明にあたって ethology という概念を用いるなど, 人によってかなり異なった使われ方をしてきた¹³⁾。

それでは一体, Ethologie のギリシャ語の語源は何であろうか。実はこの語源には二つある。一つは *ἔθος* で, 英語では *ethos* と綴るが, この語は「習性」とか「習慣」を意味する。いま一つは *ἦθος* (*ethos*) であって, これは *ἔθος* から派生したものといわれ, しばしば複数形で「性格」や「人格的態度」を表わす¹³⁾。

このように, 両ギリシャ語は類似してはいるが, 微妙に異なっていることがわかる。Heinroth は Ethologie を当然 *ἔθος* の意味で用いたのであろう。因に, このイプシロンは短母音で, 短く [e] と発音するが, *ἦθος* のエータは長母音で [e:] と発音する。Ethik は恐らくこれから派生したものと考えられている。

III 比較行動学の立場

比較行動学の研究は, 動物の行動を自然生息場面において詳細に観察し, 動物が行ないうる行動レパートリーについての行動図 (ethogram) を作製することからはじまる。そして動物行動を行動図にもとづいて分類し, 種間, 種内での比較を通じて行動の系統的変容や進化的意味を明らかにしようとする。

Heinroth と C. O. Whitman は鳥類の行動に関して比較形態学的見地よりの研究を試み, その結果それぞれの種には固有な, 生得的な行動様式があることを見いだした。これらの研究をもとに理論的展開を進め, 比較行動という学問体系を確立したのが Lorenz である。比較行動学の中核をなす重要な知見は, 生活体内部に自発的に産出される内因性衝動の解消のために本能行動が発現され, 生物学的適応の目的を達成するために発現するのではないということ, しかもその内因性衝動の解消はそれぞれの種に特有な生得的発現機構にもとづいてなされる, という点である。したがって, 自然生息場面で, 幼体が外敵の襲来時に母親のもとに逃げこまずに, たまたまヒトの方へ接近し, その結果プロテクトを得ずして死に至った場合, 内因性機能の主として関与する系統発生的側面から考えるなら, それはそれでもよいことになる。すなわち, 系統発生的視点に立つ比較行動学では合目的性は内因性の衝動解消として考えるからである¹⁰⁾。

このような観点に立つ比較行動学は, 前田が指摘するように, 「生理的体制も行動機構も人間に比して単純な動物を研究することによって, 人間のある種の生理学的な, あるいは行動の問題を解明するうえに役立つ一つのモデルを求めようとしている」のである⁹⁾。

IV 比較行動学と行動主義

今日, 動物行動の研究にあたって, 大別して, 次の二つのアプローチの仕方が試みられている。第一は本能行動の内因性の機制を追求し, そこ

に行動法則を見出そうとする比較行動学的アプローチであり⁽⁷⁾、第二は学習理論に基づく行動主義的アプローチである。

前者の立場をとるグループは、主としてヨーロッパの動物学者を中心とした ethologist で、彼らは、個体の維持と種の保存にとって意味のある行動を自然棲息場面で研究する。そしてこの学派は、行動生理学と動物心理学とをその体系中に収めながら生命的行動の基本型を動物に見出そうとしている⁽⁹⁾。

一方、後者のグループはアメリカの心理学者や生理学者が中心で、彼らは、実験条件の統制が容易な極く限られた動物種についての実験室的研究を重ね、そこで得られた知見をモデルとして、より複雑な場面に生活するより高等な動物の理解に役立てようとしている⁽⁴⁾。

これら二つのグループ間には、研究対象の違いをはじめ基本的な相違が存している。しかし、動物行動の研究は自然棲息場面での研究と同時に、実験室における統制された研究が並行して行なわれなければならないのであって、その意味で、両者は相互補完的である。また研究対象の選択問題は、その研究領域における絶対的重要性というよりは、むしろ研究者の興味によって左右されるといえよう⁽¹⁰⁾。

比較行動学の成果がはじめてアメリカに紹介された当時、行動主義者たちは理解にかなり苦しんだらしい。そのために、両者間で対立的論争が展開された。しかし、この二つの学派は、アプローチの違いはあっても、彼らの見出した事実や基本的概念が類似している点は特筆されよう⁽¹¹⁾。また、両者は主観主義を排して、観察可能なものから出発しており、この点は他の生物諸科学が用いてきた方法と本質的には同一である。

V 比較行動学と精神分析学

生活体の行なう生命活動を内因性衝動の解消過程としてとらえる立場には、上述の比較行動学のほかに、いま一つ S. Freud の精神分析学が

ある。この二つの学説はそれぞれの立場から別別に提唱されたにもかかわらず、比較行動学が系統発生的視点に立ち、他方 Freud 学説が個体発生的視点に立脚しているという相違点を除けば、種々の点で類似している。

たとえば、Lorenz によって広く知られるようになった imprinting の現象を Freud 分析学に求めるならば fixation である。fixation は対象、あるいは行動表現のいずれと関るかによって二つに分けられるが、性的異常に関して例を挙げれば前者は fetishism であり、後者は sadism や masochism である。かかる観点から imprinting を分類すれば、それは対象に対する fixation であろう。両者の類似点をみるにあたって、先ず二つの衝動論を比較してみる。

比較行動学の中核をなす重要な知見は、内部に自発的に産出される内因発生的興奮エネルギーに基づいて、本能行動が解発されるという点であろう。一方、Freud 分析学は衝動を「絶え間なく流動する身体内 (inersomatisch) の刺激源泉が心的にあらわれたもの」と定義するところから、内部の興奮事象を伴った精神過程に関する衝動学説とされる⁽¹²⁾。Freud の衝動論の独自性は、衝動の発生の基盤を生活体の器質的水準ではなく、心的機能の水準に求めた点であろう⁽⁵⁾。生活体の行なう生命現象を「衝動」という概念を用いて解明しようとするこれら二つの学説には、次にみる如く種々の点で類似性が存する。

内因性の衝動エネルギーを伴う心的事象についての Freud の学説が快楽原理にその中心をおくのは周知のことであるが、Freud にとっては衝動自身がまさに諸衝動の自動的モーメントなのである。この構想は、一つの鍵刺激が順次作用して一連の行動を最終行動へと導くとする比較行動学における興奮エネルギー搬出過程に、一脈あい通じるものがある。しかも Es, Ich, および Über-Ich によって心的構造を説明する Freud の構想は、比較行動学でいうところの本能行動の階層的機序を想起せしめる。また心的エネルギーの解放にあたって通常の channel が

阻止されるか、あるいはエネルギーの急激な増大のために通常の仕方では処理し得ない場合に両者の示す現象が酷似しているのも非常に興味深い。

ところで、生活体の行なう一切の生命活動は、滞積した心的エネルギーの解放を行ない、自体と環境との力関係において不必要な歪曲の残留を拒み、つねによりよい安定性を指向している^(7,8)。imprinting も fixation も共に内因性衝動の解消に起因してその安定を目ざすという点で同一であり、両者は心的エネルギーの処理過程として捉えることができよう。少くとも個体発生の途上で、ある衝動の解放過程としての方向性が channelling されたという点においては同一であろう。

従来、fixation の現象は主として神経症の患者との関連において研究されてきたが、この現象には次の側面がある。先ず第一に患者は、疾病の症候という形においては、過去のある特定の時期の体験を象徴的に具現し、多くの場合、その時期を非常に早期の発達段階、すなわち、乳児期あるいは幼年期にとっているということであり、第二は心的外傷を経験したのち、ある一定期間は現象的に行動として出現しないが、その後諸症候の中に現われてくるということである⁽¹⁾。これらを imprinting の特性にあてはめれば前者が「臨界期」であり、後者が「後続発現性」であろうか。とはいえ両者の間にはまだかなりの相違点が存しているのは否定できない。しかしその相違点を種による差異に求めるのは誤りであろうか。H. Stierlin は、低次の動物のエネルギー解放が専ら生物学的あるいは神経生理学的所与に基づいているのに対し、ヒトの場合は文化—社会的所与に根ざしていることを指摘している⁽⁴⁾。

VI 比較行動学の課題

動物行動の研究は、人間を直接実験対象にすることのできない研究分野において、重要な意味をもつばかりでなく、人間行動の種族発生的

特異性を他の動物のそれとの比較によって明確にしてゆく上できわめて重要である。

従来の動物行動研究は、主として操作的に条件変化の可能な対象に限られており、系統発生的視点に立って対象を選び、その行動を生活体にとって意味のある環境場面においてとらえようとする研究は意外に少ない。しかもこれまでの研究は、自然征服の旗印のもとに、人間存在をその中心におき、合目的々に、あるいは有用性という立場において、動物行動を理解してきた。それは主として生物学的次元に立ち、動物存在という内面的側面を蔑にしてきたきらいがある。

この種の行き方は、勿論、動物行動を究明する上には欠くべからざるものであるが、一定の限界がつきまとう。動物の行動を単なる種族保存、あるいは個体維持という生物学的な必然性からのみ理解するからである。形態、行動等を通じて表現される動物の自己表現としての動物存在そのものに、新たな意味を見出そうとするのは科学以前であろうか⁽⁹⁾。

〔参 考 文 献〕

- (1) Freud, S. Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. 丸井清泰訳「精神分析入門(下)」, 日本教文社, 1953.
- (2) 日高敏隆. Ethology とは何か. 科学, 45(1975), 194—198.
- (3) 日高敏隆. 科学を築いた本—②⑤—コンラート・ローレンツ『鳥の環境世界における仲間—社会的な行動様式の解発契機としての種仲間』, 科学サロン, 東海大学出版会, 25(1983).
- (4) 糸魚川直祐. 霊長類における行動発達研究. 待兼山論叢(大阪大学文学部研究論文集), 1(1967), 15—35.
- (5) 糸魚川直祐. 初期行動の自発性. 前田嘉明編 講座心理学 5. 東京大学出版会, 1969, 111—138.
- (6) 前田嘉明. Max Planck 比較行動生理学研究所に Lorenz 教授を訪ねて—本能行動の諸問題—, 動物心理学年報, 5(1955), 85—95.
- (7) 前田嘉明. 転位行動の考察—比較行動学の立場から—, 大阪大学文学部記念論文集, 1959, 87—128.

- (8) 前田嘉明. 衝動論序説. 海星女子学院短期大学研究紀要, 2 (1962), 15—39.
- (9) 前田嘉明編. ニホンザルの行動研究—岡山県中国勝山の野生集団を中心に—. 大阪大学文学部心理学研究室, 1967.
- (10) 前川純孝. Imprinting の諸問題. 待兼山論叢 (大阪大学文学部研究論文集), 2 (1968), 11—29.
- (11) 小野嘉明. 動物心理学. 梅津八三ほか編 心理学事典. 平凡社, 1957, 519—522.
- (12) 佐藤幸治. 性格学. 梅津八三ほか編 心理学事典. 平凡社, 1957, 376—377.
- (13) Schaffner, B. (Ed.). Group Processes. Macy Foundation, New York, 1955.
- (14) Stierin, H. Zwei Triblehren: Lorenz und Freud. *Nervenarzt*, 25 (1954), 407—410.
- (15) 田中良久. 動物心理学. 共立出版, 1956.
- (16) Thorpe, W. H. Comparative psychology. *Ann. Rev. Psychol.*, 12 (1961), 27—50.